

## 未来を生きる子どもたちへのメッセージ ①

### 『開扉祭と今年の思い出俳句』

津島には季節ごとに祭りがあります。冬の祭り、というよりも春を告げる祭りが「開扉祭」(おみとまつり)です。700年以上も前から行われている祭りで、古くは「由貴供祭」(ゆきのくさい)とも「御戸開神事」(みとひらきしんじ)とも言われてきました。津島神社がメイン会場となります。かつては深夜1時でしたが、現在は旧暦2月1日の午後8時に行われます。お供え用の高杯に神饌(神に供える食事)を載せ、神が祀ってある内陣に運びます。奉幣(ほうへい)が行われる時に、葎(よし)でつくられた大松明(たいまつ)に火がともされます。大松明は2本あります。直径1メートル、長さ10メートルの筒状のもので、火が点ると東大鳥居をくぐり社務所前へと進みます。境内を練り歩き、一気に楼門をくぐり、拝殿前に出ます。この時の「ボッ」「パチパチ」と燃える火の音に驚かされます。

大松明の間を神職は本殿に進み、大松明の灯りの中、神事が行われます。津島神社にある居森社・弥五郎殿・八柱社・荒魂社の供え物も取り替えられます。この時、いつもは開いていない内陣の扉が開いているのが祭りの名前の由来となっています。大松明を担ぐと厄除けになるほか、燃え残った葎を箆で使うと「中風除け」「歯痛除け」になるそうです。市の無形民俗文化財に指定されています。

新聞に載せていただいた4句です。

#### 『校庭を歩く人なし蝉時雨』

夏休みの小学校。昼の休憩時間に前を通りました。学校閉校期間ということもあり、蝉の声だけが校庭に響いていました。

#### 『朝よりの会議を終えしおでん鍋』

一日に渡る長い職員会議。あまり会議の成果はあがっていません。優しいおでん鍋が疲れた体を癒してくれました。

#### 『銭湯の赤き暖簾や法師蝉』

街中に残っている銭湯の赤暖簾が揺れていました。風呂から出たら、法師蝉が鳴いていました。今年も厳しい残暑が続きました。

#### 『小満や咳止めを飲む旅の朝』

北海道・帯広への出張の朝、咳が止まらず、薬を飲みました。同行した先輩がその後亡くなり、忘れられない旅行となりました。

毎朝、市役所へ出勤する前に散歩をしています。思いついた俳句を携帯にメモしています。お陰で四季や身の回りの小さな変化に気づくようになりました。

令和6年12月2日  
津島市教育委員会  
教育長 浅井厚視